



月刊 千葉労働運動

最大の正面闘争を 迎えた

③

【四七六七号よりつづく】

本音と建前

国労の指導部には、闘ったら組織が分裂し、組合員がついてこないという、民同指導部が一貫して根強く持っていた体質が抜けきれていない。国労の綱領にも「社会主義政権の樹立」がうたわれているが、それは建前に過ぎない。また、運動のあらゆるレベルで、本音と建前の使い分けが行われ、組合員はそのもとで翻弄されている状態だ。

結局、自らの力で現状を変革するという情熱によって運動が組織されるのではなく、現在の体制のなかでどうしたらうまくいくのかということからすべてが発想されてしまう。ひとこと言えば体制内労働運動だ。しかし、国鉄分割・民営化攻撃は、そもそも本音と建前の使い分けによつてのりきれるようなものではなかった。にもかかわらず国労は、敵の攻撃の熾烈さ・徹底性について、その本質から目をそらし続けている。また、本音と建前の使い分けは、必然的に団結の風化をもた

らす。今国労は、今日まで守りぬいてきた階級的団結が風化し自壊しかねない、深刻な危機に直面している。

攻撃の意図、勝利の地平

国鉄分割民営化攻撃は、中曾根が、「国労をつぶせば、社会党・総評がつぶれるということ」を明確に意識してやった。「私の大きな成果は」労働運動、労働組合の動向に大転換をきたさせたことです。(分割・民営化で)左翼的な戦闘的な労働組合運動が変わって、いわゆる連合ができる素地をつくった」と公言しているところ、戦後労働運動の大転換―解体を狙う、きわめて大がかりな攻撃であった。

このような、戦後かつてない執拗な攻撃にもかかわらず、一〇四七名の闘争団を先頭として、国労千葉が闘いを貫き、国労三万が残って闘いつづけているということは、労働運動の未来にとって、はかり知れないほどの大きな意味をもっている。分割・民営化攻撃が開始され

た当初、10年をこえて不屈の闘いが続くということ誰が予測しえたのだろうか。われわれは、国鉄闘争の現局面が、国鉄労働者の粘り強い不屈の闘いが作りだした勝利的な情勢であるということをもつとはつきり確認する必要がある。だからこそ自信と確信をもって、ここに、10数年間の闘いの教訓や蓄積のすべてをぶつけることができるならば、勝利の展望は必ずひらける。われわれは、厳しい闘争を貫いて敵の意図をうち砕き、追いつめ、反転攻勢へのチャンスを手に入れているのだ。

敵を追いつめた

今、JR体制は決定的な危機にたつている。それは、一方で分割・民営化政策そのものの破たんとして傷口を広げ、もう一方では、JRとJR総連・革マルの結託体制の危機として進行している。

一〇四七名問題は、JR体制が抱える危機と矛盾の凝集点だ。何よりも、国鉄改革法体制という攻撃の根幹にかかわる問題であり、また革マル結託体制を激

しく揺さぶる問題である。さらには、現在の情勢のなかでは、絶えずJRという個別資本の利害と国家意志との衝突を生みだす問題にも発展している。もう一つは、分割・民営化政策の旗印であった長期債務の処理問題が、ついに、国鉄改革法の枠組みを変更して、国民に増税を強い、「JR負担」というかたちで、JRで働く労働者にさらなる犠牲の転嫁を行わざるを得ない状況に行き着いたということだ。それは、同時に貨物や三島JR貨物の経営破たんとしてもあらわれている。

ここに闘いを!

今や、JR体制は二進も三進もいかない危機にゆき着いている。このJR体制に向かつて全組合員の団結力をぶつけていくならば、勝利の展望を切り開いていくことは全く可能である。

分割・民営化攻撃の元凶は、自民党政府であり、国鉄・JR資本であり、その手先となつたJR総連・革マルであつたわけだ、これに対する闘いを抜きにして国鉄闘争は、一歩も進まない。一〇四七名の闘いは、JRを不当労働行為の責任をとるべき当事者として引きずりだすことが、当面の最大の課題だが、それも、JR体制打倒の闘いの前進によつてしか実現しないことだ。資本は、困り果て、追いつめられなければ労働組合には譲歩はしない。国労指導部は、JRを引きずり出すためにJR体制と闘うのではなく、政府・自民党に依拠するという間違つた方針をとつてしまつている。ここを打開しなければならぬ。(つづく)